

自然との触れ合いの機会としての散歩のあり方と課題を探る —第2回やまほいく研修会の実践を通して—

The way and challenge of the stroll
as the opportunity of the contact with nature:
Through the practice of the second YAMAHOIKU workshop

堤 裕美 清水 智博 寺沢 拓弥
TSUTSUMI Hiromi SHIMIZU Tomohiro TERASAWA Takuya
長岡 慶将 渡邊 真也
NAGAOKA Yoshimasa WATANABE Shinya

キーワード：散歩、自然、保育者、子ども、地域資源

I. はじめに

保育用語辞典¹⁾では、散歩は「1日の流れをとくに変えないで、園の周辺に出かける日常的な活動であり、季節に応じて乳児から年中児まで、地域の人々や自然に出会い、よりよい関係を育てていく機会となる」と記述されており、太幡ら（2013）の調査の結果では、約8割の園で週1回以上の散歩を実施している²⁾。このように保育所においては、散歩は日常的に行われている活動であると言える。しかし、井上・無籐（2007）は、散歩などの園外活動を実施していたとしても、その頻度が高いことをもって自然と関わる活動が多いと判断することはできないと述べ、園の設置環境の条件に関わらず、豊かな自然体験活動を導入していくためには、保育者の意図も重要であると指摘している³⁾。

散歩に対する保育者の意識や詳細な実施実態を調査した先行研究は少ないが、山田ら（2019）は、保育者の語りを分析し、散歩を通した子どもの育ちについての保育者の認識を調査し、6カテゴリー、32概念で説明している⁴⁾。最も語りの数が多かったのは、「近隣店舗・施設の人と交流する」、「地域環境を知る」、「近隣の人と交流する」などの概念から成る「社会生活との関わりを通して、社会とのつながりを意識する」というカテゴリーであり、次いで、「樹木・草花に関わる」、「季節の変化に気づく」などの概念からなる「自然の美しさや不思議に気づく」であっ

た。その他には、「体を動かす気持ちよさを感じる」、「友達との関わりの中で協働性を育む」、「外で過ごす気持ちよさを感じる」、「周囲の環境に積極的に関わることにより思考力を豊かにする」の4つのカテゴリーがあり、保育士が認識する散歩を通した子どもの育ちは、多様な側面を持っていることがわかる。

多様な側面から子どもたちの育ちへの影響が考えられる散歩ではあるが、中でも特に地域資源や身近な自然環境と接する機会としての散歩の意義や魅力を考えてみたい。林（2003）は、「身近な自然」とは日常の生活範囲にある動植物や自然現象で、どこにでもあるごくありふれた風景であり、それだけに無視されがちで気付かない存在でもあると述べている⁵⁾。そして、自然がないと嘆く園では、豊かな自然を求めて園外活動に活路を見出そうとし足元を見ていない。一方で自然に恵まれた園では、その豊かさに安心し子どもの自然とのかかわりの実態を見ていないと問題提起し、自然の豊かさに差こそあれ身近な自然はどこにでも存在し、保育者がその身近な自然に自ら気づき、園内や園周辺の自然環境を十分に把握した上で、受け持つ子どもたちの感性に応じた自然事象を気づかせる工夫を日常的かつ継続的に行うことが大切であると述べている⁶⁾。

そこで、「地域資源を保育に繋げよう」という大きなテーマのもとで「散歩の魅力を再考する」ことを目的とした研修会を行い、参加した保育者、保護者、子ども、学生とファシリテーターとして3名の保育士と助言者に同行してもらい、目的地となるような場所ではなく、日常的に使用する大学周辺の道路を散歩した。さらに、3名の保育士によるふりかえりと助言者による提言を通して、参加者自身が散歩について改めて考え、意見交換をすることにより、散歩の機会がもつ学びの可能性を捉え直し、保育における散歩の意義を再検討した。

II. 方法

1. 対象

信州型自然保育認定園や近隣の公共施設等にチラシを配布し、県内の保育者や地域で子育てをする保護者等に参加を呼びかけ、本研修会に参加したのは57名（内訳：保育士30名、幼稚園教諭10名、保護者5名、子ども12名）であった。また、当日の準備及び運営として学生スタッフ6名、講師4名、養成校教員4名に協力を依頼した。

2. 日時

令和元年9月15日（日）10:00～15:00

3. プログラム細案

表1. 当日のプログラム

時間	内容
10:00～	開講式

10:30～	散歩にでかけよう！ ※3つのグループ (A,B,C) に分かれ、混雑を避けるためスタート地点をずらした。
11:30頃	戻ってきたグループからふりかえり ○ワークシートへの記入
12:00～	参加者昼食
13:00～	午前の活動のふりかえり ○スライドショーでふりかえる。
13:05～	ファシリテーターによるふりかえり ※Aグループに同行した保育士から順に20分ずつ
14:15～	助言者による問題提起 ○参加者にとっての散歩とは ※グループごと、参加者一人ひとりにとっての散歩の魅力を発表し共有する。
14:50～	閉講式

4. 散歩ルートについて

太幡 (2013) は、散歩を楽しむ道路環境として、「滞留スペースが十分に確保できること」を挙げている²⁾。そのため、できるだけ交通量が少なく、隊列を崩して各自のペースで進んだり滞留したりできる道幅の道路を選択した (図1)。また、ルートについても目的地を目指して歩く意識を除き、途中で何度でも滞留ができる「散策型」を設定した。

なお、参加者は概ね均等に3つのグループに分かれ、それぞれスタート地点を変えることにより、混雑を避けた。また、子どもの様子を通して気付くこと、発見することも大切にしたいと考え、子どもも保護者とともに均等に3つのグループに分かれるように調整した。

5. ワークシート (図1、2)

参加者は、道中の気付きや発見、感じたこと等を可視化するために図1の地図に自由に書き込みをした。また、昼食の時間等も使いながら散歩活動全体を通してのふりかえりとして、図2のワークシートへの記入を行った。なお、お散歩マップ&ワークシートは上田女子短期大学の倫理審査委員会の承諾を得た上で使用し、参加者にも目的と使用法を説明し、同意を得た上で回収をした。

Ⅲ. 講師によるふりかえり発表

1. 講師Aによるふりかえり



左上：かたばみの葉

右上：かたばみの葉を実際に食べて
みた参加者

左下：細い柔らかい葉を鳴らして
遊ぶ参加者

右下：おしろい花の種の中から白粉
を出す様子



左：干からびた蛙をみつけた男の子

右：干からびた蛙を拾うお父さんと
後ろに隠れて様子を見る子ども



左：刃物を発見したと思える場面

右：クシだったことに笑う男の子



左：道路にできた亀裂に拳を突きつけ
て遊ぶ姿

右：踏んで亀裂を生じさせたかのよう
に遊ぶ姿



左：子どもがジーっとみている視線の先が、左上のかまきりの死骸だと思っていたら、実は、その横の四角い石を机と椅子に見立てていた。

かたばみ、すすき、荒地ウリ、葉笛、オシロイバナ、オヒシバナなど紹介された植物は6種類、生き物はかなへび、ショウリョウバッタ、ザリガニ、カニ、タニシ、干からびたカエルも含めると6種類であった。「3歩歩いて止まる」から「散歩」というのではないかというほど立ち止まる機会が多く、1km程のコースを1時間半程かけてまわった。ゆったりとした時間の中で、ゆったりとした気持ちで散歩を楽しむことができると、子どもの表情から子どもの気持ちの移り変わりを感じ取ったり、一緒になって気持ちが揺り動かされるような感覚を味わうことができるのだろう。また、ゆっくりと思いつきに歩くから見つけられるものがあり、それは大人も同じで、ゆったりとした気構えで子どもと散歩をするからこそ、子どもの物の見方の面白さや大人との違いをその場で感じることもできるのだと再認識した。さらに、大人も遊び心をもって周囲のものを見てみることの面白さも知ることができた。そして、実際にかたばみの葉は酸っぱいのか、どのくらい酸っぱいのか大人も試してみたり、オシロイバナの種から白粉を出してみても名前の由来を実感したり、大人も実際に体験してみることも大切である。

2. 講師Bによるふりかえり



左：すすきの葉をみつけ、矢のようにして飛ばして遊ぼうと試行錯誤する様子

右：飛んだことを喜び合う親子



上：根元から葉を削ぎ取ってできたバラのようなお花

下：葉の鳴らし方を教わり、やってみる様子



左：フェンス右上の蛾を怖がって
立ち止まる男の子

右：バッタを捕まえて見せる男の子



左：窓越しにカマキリをじっと
観察する子ども

右：何かを観察するために、枝
葉の中に顔を押し入れている
姿

8種類ほどの植物が写真で紹介された。加えて、その植物で遊んでみる様子やその時の表情について、じーっと窓の外の虫を眺める子どもの表情や、身構えてじーっとみつめる様子、得意げに周囲に見せる表情など様々な場面での子どもの表情の違いに改めて気づくことができた。そして、それは大人も同じで、植物の中に顔を思い切り押し込んでみたり、すすきの葉を飛ばそうと真剣な表情で葉を裂いている様子、すすきの葉が飛んで嬉しそうに子どもに無邪気な笑顔を向けるお母さん等々、表情が物語る心情などにも思いを寄せた。また、初めは虫を怖がって近づけずにいた男の子が、散歩の後半には大きなバッタを捕まえて意気揚々と周囲に見せる姿もあり、たった1時間程の中でも子どもの姿に変化が見られることに気づかされた。

また、地域資源として地域の歴史や文化財なども大切にし、散歩を通してそれらに子どもたちが触れ、地域に対する親しみや愛着を持って欲しいという保育者の願いも紹介した。塩田平は古くから人の暮らしが定着している土地で、子どもたちが歩いて移動できる範囲にその歴史を感じられる場所がたくさんある。中でも、生島足島神社や、いにしへの丘公園、第六のけやきなどの写真が紹介され、保育者自身の地域への興味関心や親しみを通して、子どもたちも地域への愛着を抱くことができればとの願いを伝えた。

3. 講師Cによるふりかえり



左：散歩中に子どもが発見した様々な生き物



左：枝をぶつけ合わせて音を出す
ことを楽しむ男の子

右：側溝の鉄板を踏んで音を出す
ことを楽しんで繰り返す姿



左：落ちていた蛾の蛹を実際に
開いてみる様子

中・右：蛹の中



左：ザリガニを間近でじっと
観察する男の子

右：親子でザリガニで遊ぶ様子



左：エノコログサを毛虫に見立てて実際に動かしてみる様子

中：オヒシバでつくったステッキ

右：朝顔の葉っぱをへこませて大きな音を出す様子

トンボやバッタやガ等の道中で出会った虫を「手のひらを太陽に」の歌詞にのせて紹介した。不思議とそれらの虫への慈しみのような気持ちが湧いて、改めて私たちの周りには沢山の生き物が私たちと同じように生きているのだということを実感する。歌詞に出てくる虫を実際に目にして捕まえたりすることができる環境を出来るだけ多くの子どもたちに保障しあげたいと思う。一方で、生き物や、植物とは関係なく、音を鳴らすことに楽しみを見出し、色々な物で音を出したり、繰り返し同じ場所で音を出したりして楽しむ子どもの姿から

子どもの興味関心が大人の想像を超えることを実感した。また、実際に蛹を開いてみたり、葉っぱを鳴らしてみたり、エノコログサを毛虫のように動かしてみたり、オヒシバでステッキを作ってみたり等、一見知識としては持っていて知っているようなことも、実際にやってみると新鮮で、大人にとっても新しい発見となるのがたくさんあることを学んだ。

何かをやってみることが、周囲の人を引き寄せ、教え合ったり、聞きあったり等自ずと関わりが生まれることも改めて実感した。

4. 助言者による散歩の魅力とは

『広辞苑（第7版）』では、散歩とは「気晴らしや健康などのためにぶらぶら歩くこと。あてもなく遊び歩くこと。そぞろ歩き。散策」と記されている。また、大辞林では、「特別の目的をもたずに、気の向くままに歩くこと。散策」と記されている。子どもにとっての散歩の心得として、「①知ることよりも感じる事が大切である。②興味関心にのめり込む。③急がず、ゆっくり、じっくり歩く。④大人も楽しむ姿勢を持つ」ことを挙げ、子どもにとっての散歩は、目的地向かうものではなく、「興味・関心を育むこと」を目的に行うことであり、「自ら判断し、主体的に動く」子どもの姿へと導く身近で学びの深い生の体験活動であると説明し、散歩には、目的地の設定よりも、道中をゆったりと子どものペースで進むことのできる時間的、精神的なゆとりが必要であると主張した。



（「いのちと出会う自然散歩」より）

そして、渡邊氏の考える“散歩の魅力とは「ゆるくて多様な出会い」であると述べ、人と出会い、協力・協働する出会い、心地よさとの出会い、新しい自分との出会い、ドキドキ・ワクワク、探求との出会い、本物との出会い、不思議な出会い、美しさとの出会い、動物や虫との出会い、自然の驚異との出会いを挙げ、様々な可能性を示した。さらに、「散歩道」を何と読むかと参加者に投げかけ、あえて「さんぼどう」と読んでみると、柔道や剣道、空手道、書道、茶道等のように、その行為を通じて「人としての成長を目指す」こと、つまり「極める」と解釈することもできると説き、自分なりの散歩道を極めることを意識すると奥が深くなるのではないかと提言した。

IV. 参加者のワークシートから見えてきた散歩の魅力とそのために学びたいこと

ワークシート(図2)の「あなたが考える“散歩の魅力”とは」に対して、参加者が挙げているワードは、「解放感、開放」、「発見」、「出会い」、「感じる、五感」、「心がうごく」等が多かった。また、「子どもにとっての散歩がさらに充実した時間になるために、保育者・保護者としてどんなことを学びたいですか?」の質問に対しては、大きく4つの特徴に分けられた。①「自然の遊び方(葉をたたく、吹く、飛ばす、はじける等その場ですぐに楽しめる遊び)を知っていると、『ただ通り過ぎてしまう』から『ここにこれがあった』にかかわると感じた」という回答に代表されるように、植物や虫などの名前や特色を知ったり、草花での遊び方を知ったりすることで、散歩の楽しみ方が広がるのではないかと回答がもっとも多かった。これらの回答の中には、「楽しさを感じられる感性」、「子どもの興味関心に共感する力」を合わせて挙げている場合もあった。実際に②「遊び方の知識にこだわるのではなく、私自身が楽しみながら、子どもとの時間や自然の面白さや不思議さをとことん味わえるような散歩をしたい」、「植物や虫の名前などを知り過ぎて、一緒に感動したり、関心がもてなかつたりしたら、散歩の良さが低減してしまうのかと思う。一緒に驚いたり、調べたりすること、子どもからの情報も大切だと思う」との回答もあり、植物や生き物についての知識に依存するだけでは、子どもとの散歩が充実することには繋げないと推察する。一方、③「どこにどんなものがあるかを知りたい」、「四季を通しての散歩を体験したい」、「どの時間に散歩に行くのがよいか」など、身近な環境の特色を四季の変化や時間による違いも含めて把握していきたいとの回答もあった。

また、④「動植物などの知識」と同じくらい多く挙げたのが、「歩く上での安全確保」、「毒のある植物、蛇や蜂など、危険なもの、ことの知識」、「散歩道での危険な場所」、「散歩の際の持ち物」、「下見の際に注意して見る所やポイント」など、安全への配慮についての知識であった。

V. 研修会から見えてきた散歩の魅力と課題

2019年5月8日に天津市の認可保育所で、散歩中の園児に交差点で衝突した車が突っ込み、園児2名が亡くなるという大変痛ましい事故があった。事故後には各自治体への散歩ルートの申告や危険箇所の再点検、職員配置の見直し等、散歩に対する慎重な姿勢も広がり、一時は散歩を自粛する動きもあった⁶⁾。安全面への配慮や、ルートの選択など、保育者は魅力的な散歩になるようにということだけを考えて散歩に臨んでいるわけではない。今後、安全面への配慮についての知識や実践例の共有も必要になるだろう。

しかし、そもそもなぜ散歩をするのか、危険がないとは言えない園外を活動のフィールドとして活用していく意義を保育者自身が実感して改めて考える機会も必要ではないかという視点で本研修会を行った。

1. 研修会の準備を通しての散歩に対する認識の変化

今回の研修会を行うにあたり、具体的な活動内容やルート等を検討するため、大学周辺を何度も下見した。4月には、ゼミの学生と下見も兼ねて周辺を歩いてみた。しかし、はじめは、目的地を設定しなければ活動が成立しないように感じられ、散歩に対して雲を掴むような思いでいた。その後、周辺は田植えが行われ、辺り一面が茶色一色から青々とした景色に変化し、それと共に蛙やハルゼミの鳴き声が響くようになり、至る所からニセアカシアの甘い香りが漂うようになり、自ずと足を運び、日常の会話の中に周辺の植物の話題が出るようになり、少しずつ周辺環境への関心が深まった。8月には、猛暑の中、ファシリテーターをお願いした保育士の方とルートを下見し、道中の植物で実際に遊び、生き物を発見し、少しずつ私自身が散歩の面白さや楽しさを実感することができた。また、別の日には、保育士とそのお子さんと一緒に下見を行い、子どもの目を通した散歩の面白さや楽しさについても、大人と違った視点や感性に新鮮な発見があった。

2. 身近な自然に対する知識と人的環境としての保育者の役割

四季を通して散歩を繰り返すこと、色々な人と散歩に行くこと、子どもと一緒に散歩に行ってみることを通して、自ずと身近にある自然が認識されるようになり、名前を知る知らないに関わらず、目にする植物の特色や遊び方を少しずつ知り、季節や時間の流れとともに起こる身近な自然現象への関心も高まってきたと感じる。井上・無藤（2007）は、現代の子どもの自然体験の不足を補う役割を保育現場に求め、保育者の意図の重要性を指摘しているが、特に、「自然と生活を互いに入り込ませる実践」の必要性を説いている³⁾。現代の生活に自然が無縁になりつつあることを考えると、まずは周辺の自然環境に興味関心を持つことから始まるのだろうと考える。その際、散歩中の子どもたちへの人的環境としての保育者の寄り添い方は、子どもたちの生活と身近な自然が結び付けていかどうかの鍵になると考える。「自然あそび」の必要性は大正自由教育の中でも既に着目されており、その頃から、大人の関わり方が「ただぼんやり遊ばせていたり、そうでなければ、小学校の理科のようなものになってしまっていて、幼児の興味や能力を引き出すことができないばかりか、反対に、幼児の興味や能力の眼を摘んでしまっている」と指摘し、その要因を「先生自身が、自然あそびの面白さを知らない」ためと指摘している⁷⁾。野村（1964）は、「自然あそび」には、人的環境として教師や保育者など大人が重要な役割を果たすが、その大人は、「あそびを一緒につくっていく」関係、つまり仲間であり、協力者であると認識している⁸⁾。そのためには、子どもの自然遊びに寄り添う大人には、恒常的に自然を研究していく姿勢が必要であるが、その知識は、子どもたちが自然の事実に出合うためのものであり、子どもたちにそのまま教えるためのものではない。教師自身が自然に親しんでいてこそ、四季や機会を生かした、自然の妙味を味わえる「自然あそび」を子どもに伝えることができると述べている⁹⁾。

3. 時間的・空間的な自由と責任

参加者のワークシートには、「時間や空間のゆとりづくり」、「子どもが見つけたものを満足するまで見ていられる時間をつくりたい」など時間的な制約についての回答も散見された。高田(2003)は、自然との触れ合いを支える要素を9つ挙げているが、その一つに「子どもに保障された時間的、空間的な自由と責任」を挙げている¹⁰⁾。幼児が、その生活空間の中にある身近な自然に対して自ら関わり、子どもが「自分の責任でやる」機会も保障していきたい。

4. まとめ

日常生活では、自然と生活が切り離されているように感じられるが、天災の度に自然の驚異には人間は太刀打ちができないことを切実に痛感する。そして、本来は人間も自然の一部であるということを意識させられる。自然の中から学ぶ謙虚さをもっともっと大切にしていきたい。また、地域を知ること、地域と繋がることから子どもたちに育まれていくものも大切にしたい。

参考文献

- 1) 菅田栄子. 『保育用語辞典』「第7版」. 森上史郎・柏女霊峰(編). 東京, ミネルヴァ書房. 100. 2013.
- 2) 太幡英亮・古川智之・恒川和久・生田京子・谷口元. 保育園児の散歩行動と街路環境の関係—名古屋市認可保育所での散歩行動観察を通して—. 日本建築学会計画系論文集. 78(689). 1533-1542. 2013.
- 3) 井上美智子・無藤隆. 幼稚園・保育所における自然体験活動の実施実態. 教育福祉研究(33). 1-9. 2007.
- 4) 山田千愛・寛川慎子・高木夏奈子・栗原ひとみ・高野良子・小池和子. 園外活動における子どもの発達を促す地域環境—散歩を通した子どもの育ち—. 植草学園大学研究紀要. (11). 53-63. 2019.
- 5) 林幸治. 子供の身近な自然とのかかわりに関する実践的研究—散歩のすすめ—. 日本保育学会第56回大会抄録集. 574-575. 2003.
- 6) 信濃毎日新聞. 県内園児の安全守る. 2019年5月10日. 朝刊.
- 7) 野村芳兵衛. 「科学的な態度を育てる幼児の自然あそび12ヶ月」黎明書房1967.
- 8) 野村芳兵衛. 「幼児と自然のあそび(六月)」『母と子ども』. (57). 32. 1964.
- 9) 布村志保. 「幼児期における「自然あそび」の意味—野村芳兵衛の取組に着目して—
- 10) 高田憲治. 「自然と触れ合う環境づくりの実践と課題—子どもと自然と保育者の動的・相対的な実践研究—. 保育学研究. 41(2). 93-101. 2003.